

書評

荒野泰典・石井正敏・村井章介 編

『日本の対外関係六 近世的世界の成熟』

(吉川弘文館、二〇一〇年)

矢森小映子

「日本史も日本人も嫌い。」子どもにもそう言われたら、あなたは何と答えるだろうか。

「日本」とは、「日本人」とは何か。この問いは、ますます強まるグローバル化とナショナリズムの狭間で、今切実なものとなってきている。『日本の対外関係』は、日本がどのような歴史的環境のもとで歩んできたのかを明らかにし、その「内」と「外」の狭間に光をあてること。この問題を捉え直していく、新シリーズである。本書はその第六巻にあたり、一七世紀末から一九世紀前半を対象としている。

本書の構成と概要は次の通りである(カッコ内は著者)。

通史 近世的世界の成熟(荒野泰典)

I 歴史的展開

- 一 「華夷変態」後の国際社会(岩井茂樹)
 - 二 砂糖をめぐる世界史と地域史(眞栄平房昭)
 - 三 ジェンダーから見る近世日本の対外関係(松井洋子)
 - 四 世界のなかの近世文化(海原亮)
 - 五 露米会社とイギリス東インド会社(木村直樹)
- #### II 対外関係の諸相
- 一 「三国」から「五大陸」へ(三好唯義)
 - 二 日本型華夷意識と民衆(池内敏)
 - 三 長崎と広州(原田博二)
 - 四 琉球館と倭館(渡辺美季)
 - 五 通訳と「四つの口」(松方冬子)
 - 六 蘭学における中央と地方(青木歳幸)
 - 七 ティツイング往復書簡集の世界(鳥井裕美子)
 - 八 異国・異域情報と日常世界(杉本史子)
 - 九 「夷酋列像」をよむ(谷本晃久)
 - 十 世界のなかの日本銅(島田竜登)

本シリーズはいずれも冒頭に大まかな見通しを示す「通史」がおかれ、対外関係の流れを時系列に沿って述べた「I 歴史的展開」と、個別のテーマに絞って論じた「II 対外関係の諸相」の二部構成をとっている。

「通史」(荒野)では、まず本書の表題と時期区分をめぐる定義が示される。東アジアなどの「世界」が相対的に自立性を保ちつつ、成長しつつある「世界システム」とゆるやかな関係をもちながら地球的世界に併存している時代を「近世」と呼ぶ。この「世界」とは「自分が属している既知の地域」から「相互作用によって結びつけられているすべての事物や過程をふくむ全体」までの広い意味をもつ。その「世界」の中でも、例えば東アジアでは中国王朝との「縦の関係」(冊封関係)のみならず、それぞれの「華夷秩序」を設定し競合しつつ併存する周辺諸国相互の「横の関係」も存在している。対象とする時期は、清の展海令によって中国本土から長崎に貿易船が大挙して押し寄せた貞享二(一六八五)年から天保一三(一八四二)年の薪水給与令までである。この期間の動向が、日中互市システムの確立、新井白石による日朝・日琉関係の手直し、享保改革に始まる中国・朝鮮文化の受容とその血肉化がもたらす近世文化の成熟、日本市場圏の中国市場圏からの自立、外圧と海防、という観点から叙述される。

I部の岩井論文では「華夷変態」後の国際社会の動向を、清の「海禁」から「互市」への転換として捉え、「華夷混合」の社会が発展することへの警戒心があったことを指摘する。真栄平論文は砂糖の生産・流通・消費とそれをめぐ

る支配構造などの視角から、世界史を織りなす地域史を考察した。松井論文は近世日本の対外関係をジェンダーという視角から捉え、長崎における男女関係や混血児の扱いから具体的に検討した。海原論文は、海外交易の拠点機能を併せもち、きわめて国際色豊かな環境にあった大坂を舞台に、「異国」の文化・学問が浸透するさまを描き出す。木村論文は、一八世紀末から一九世紀初頭におけるロシア・イギリスの日本接近の意図を、露米会社・イギリス東インド会社・オランダ東インド会社という特権的諸会社とそれを取り巻く情勢から解き明かした。

II部の三好論文は、日本人固有の三国世界観から五大陸への世界地理認識の変遷を、近世に描かれた世界図資料から探っていく。池内論文は「日本型華夷意識」の核をなす「武威」について、武士と民衆の距離感を検討し、朝鮮漂流日記の分析から「文化的共通性の欠如」が民衆レベルの対外観・交流にもたらした影響を指摘した。原田論文は、ともに国内唯一の貿易港であった長崎と広州を、都市構造と貿易の仕組み、さらに背景にあった思想・意識などから比較し、その共通点と相違点を明らかにした。渡辺論文は福州の琉球館と釜山の倭館について、その性質や役割を比較した上でそれぞれの独自性を考察する。松方論文は「四つの口」における通訳のあり方を比較し、近代における「日本語」

の創出までを展望した。青木論文は、「中央と地方」という視角から蘭学史を叙述し、蘭学が地域に結びつきながら興隆するさまを生き生きと描き出す。鳥井論文は、オランダ商館長を勤めたティツィングと長崎通詞・蘭学者・出島

商館員らの間で交わされた往復書簡集の内容を紹介し、その史料の価値を指摘した。杉本論文は、「外」からの情報をもたらし、イメージを形づくる「近世的公開メディア」という新たな方法論を提示する。谷本論文は、アイヌ首長像「夷酋列像」について、像主の一人であるイコリカヤニの生産活動に注目し、当該地域社会史から「夷酋列像」を読みなおしてその意義を論じた。島田論文は、オランダ東インド会社の日本銅貿易を中心に、日本銅の国際的な流通構造を概観している。

本書の第一の面白さは、ゆるやかに結びつき併存しているいくつかの「世界」、という地球的規模の視野で描き出す手法であろう。例えば「通史」（荒野）において、ケンペルに始まるヨーロッパ人の日本・アジア観の変容とその背景への言及が随所に挿入されているのも、我々読者の視野を広げる仕掛けの一つになっている。海舶互市新例（岩井論文）、明治維新における薩摩藩の活躍（真栄平論文）、ロシアとイギリスの来航（木村論文）、銅輸出（島田論文）といった、日本史の教科書にも出てくる、よく知ったつも

りの事柄が、地域・日本・世界の連動性の中で生き生きと描き直され、読者である私たちは、いくつかの「世界」がゆるやかに結びつきながら併存する「近世的世界」のありようを確かに実感することができる。

またその視角は「外」のみならず「内」にも向けられている。対象の内容・実態にとどまらず、それをはぐくみ発展させたもの（荒野氏はそれを「土壌」と呼んでいる）は何だったのか、という点も追究されるのである。特に関わるのが海原論文・杉本論文であり、その中で「土壌」は「世界」と結びつけられ、世界的な連動性の中で新たな意味を浮かび上がらせる。大坂における人的ネットワークや書籍の流通という「土壌」を明らかにし、「異国」の学問や文化の受容と絡めて「世界」の中に位置づける海原論文は、「天下の台所」といった教科書的な大坂イメージを鮮やかに覆すだろう。

第二に注目したいのは、「比較」という手法が取り入れられている点である。例えば原田論文では長崎と広州が、渡辺論文では琉球館と倭館が、松方論文では「四つの口」の通訳のあり方が比較される。真栄平論文においても奄美・琉球における砂糖収奪の世界史的意味が、カリブ海諸島の奴隷制・ジャワのプランテーションとの比較の中で明らかにされている。比較による類似性と相違性の探求が歴史研

究の有効なアプローチであることはよく知られているが、一方で論者の設定した比較対照軸によって結論が誘導されてしまうなど危険性もはらんでいる。¹⁾しかし「四つの口」における通訳を比較する松方論文が、あえて清朝の乾隆帝の事例から論を起こして「通訳」「言語」そのものへの議論から始めている点や、琉球館と倭館を比較する渡辺論文が最後に改めて近世東アジアの国際関係の中に位置づけている点などは、皮相な比較にとどまらない比較史の豊かな可能性を示唆していると言えよう。

近年は「東アジア」を視座とする比較史も活発だが、荒野氏の構想する「世界的な比較史」(「通史」)がこれらとどのように切り結び、展開していくか期待される。ただそのためにも「世界的な比較史」について、その手法や展望にもう少し説明がほしかった。

大きい課題意識を共有しつつ様々な切り口から自由に論じられている点が本書の魅力であり、それらの論考は「通史」においてその位置づけが示されているので、読者は全体を把握しやすくなっている。しかしそれゆえに、通史・I部・II部を含めた各論考の議論が有機的に結びついていない印象も受ける。

それを最も強く感じたのは、意識・情報・文化の広がりに関する議論である。池内論文は「日本型華夷意識」につ

いて、無条件で日本人一般に広がりをもつことは想定されていないとし、武士と民衆の「武威」との距離感を分析して「文化的共通性の欠如」という大きな論点を提示する。

荒野氏は「通史」においてこれを批判し、「この時期において、およそ、ある意識をある階層の占有と断定すること自体が非歴史的事であることは、杉本史子の「近世的公開メディア」の議論が端的に示している」と述べる。しかし杉本論文の言う「近世的公開メディア」がもたらすのは「情報」や「イメージ」であり、果たして「意識」と同列に論じることが可能であろうか。荒野氏は文化の「土壌」についても杉本論文・海原論文を例に「階層を越えて共有された」点を強調するが、海原論文も「身分を横断した交流」やイメージの流布を生き生きと描く一方で、都市文人の中国趣味が「決して庶民に開かれてはいなかった」ことも指摘している。この点は、三好論文で「伝統的世界観」が変容しつつ幕末まで存続したとしながらも「十八世紀の知識人にとっては、三国世界はもはや否定され」ていたと述べている点にも通じていると言えよう。身分や階層、さらには地域を越えて共有されたものと共有されなかったものがあったのではないか。ではその差はどこにあり、それがどのような影響をもたらしたのか。近世における意識や文化・情報の問題は、そこから丁寧に見ていく必要があるのでは

ないだろうか。

本書は最前線で活躍する研究者らによって執筆され、現在における到達点が示されるとともに、新たな課題や論点も数多く盛り込まれている。例えば松井論文はジェンダーを切り口に長崎の対外関係を分析しつつ、「日本人」と「異国人」を選別する「住宅」という指標の提示、遊女の実態に関する通説の訂正、混血児をめぐる「家」の問題など、多分野に発展する論点を提起している。各論考で提起されたこれらの論点が広く共有され、さらに議論が進展していくことが望まれる。

以上、評者なりの紹介と私見を述べてきたが、評者の浅学ゆえに誤読や的外れな点もあるかもしれない。執筆者の御海容をお願いするとともに、ご教示を賜れば幸いである。「日本」「日本人」とは何か、という本シリーズのテーマは、これまで多くの研究者らによって問われ続けてきたテーマであり、一方できわめて現代的なテーマでもある。冒頭に掲げた「日本史も日本人も嫌い」という言葉は、実は本シリーズ第一巻『東アジア世界の成立』（吉川弘文館、二〇一〇年）に収められた荒野氏の総説「民族と国家」に登場する一節であり、ぜひこちらも一読されることをおすすめしたい。「日本史も日本人も嫌い」と思いこんでいる子どもたちに、研究者は今何ができるのか、という荒野氏

の問いかけを、私たち歴史学研究を志す者は真摯に受けとめなければならぬだろう。本書はそのための「地道で粘り強い仕事」の結集であり、ぜひ学部生の方にも広く手にとっていただきたい。本書を通じて、地球的規模で連動する「近世的世界」の面白さを実感するとともに、「日本」「日本人」とは何か、そしてなぜ歴史を学ぶのか、という問題をもう一度考えてみたいと思う。

注

- (1) 比較史の有効性と問題点については、ユルゲン・コツカ「比較史のかなた―近現代史へのトランスナショナルなアプローチ」史学会編『歴史学の最前線』（東京大学出版会、二〇〇四年）、山田賢「東アジア「近世化」の比較史的検討―中国大陸・朝鮮半島・日本列島―」趙景達・須田努編『比較史的にみた近世日本―「東アジア化」をめぐる―』（東京堂出版、二〇一一年）など参照。
- (2) 前掲『比較史的にみた近世日本』など。

（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）